

■スーク／組曲「おとぎ話」Op.16

ヨゼフ・スーク（1874-1935）はチェコを代表する作曲家のひとりであるにもかかわらず、ドヴォルザークやスメタナに比べるとあまり知られていないかもしれない。スークといえばむしろ、20世紀を代表する同名のヴァイオリニストを思い浮かべる人が多いかもしれないが、その祖父にあたる人である。プラハ音楽院でドヴォルザークに師事し、のちに彼の娘と結婚した。

組曲「おとぎ話」は、チェコの劇作家、ユリウス・ゼイエル（1841-1901）の戯曲「ラドゥースとマフレナ」のために書いた劇音楽を、オーケストラ用の組曲にしたものである。劇音楽は1898年に、組曲は1901年に、どちらもプラハで初演された。チェコではたいへん人気の高い組曲であるという。

スロヴァキアの民話に基づくという物語のあらすじは、次のようなものである。

狩に出た王子ラドゥースが敵国に迷い込み、捕らわれる。この国の王女マフレナはラドゥースをかわいそうに思い、恋に落ちた二人は母妃ルナの追跡を振りきってラドゥースの国へと逃げる。国では父王が亡くなったばかりだった。ルナの呪いによりラドゥースはマフレナのことを忘れてしまう。傷心のマフレナはポプラの樹に変身し、ラドゥースはその木陰でしか安らげなくなる。心配したラドゥースの母妃がポプラを切り倒すと血が流れ出し、呪いがとける。ラドゥースとマフレナはめでたく結ばれる。

スークは各楽器の音色を生かした繊細なオーケストレーションによって、この幻想的なおとぎ話の世界をみごとに描き出している。

第1曲：アダージョ・マ・ノン・トロポ「ラドゥースとマフレナの真実の愛とふたりの悲しみ」

独奏ヴァイオリンが奏でるのは王女マフレナの主題である。この優美な主題はハープのアルペジオを伴って現れる。しばらくすると弱音器付きのホルンによって音楽は不穏な雰囲気となるが、ふたたびマフレナの優美な主題となる。

第2曲：ア・ラ・ポルカ「白鳥と孔雀の戯れ」

チェコの舞曲、ポルカのリズムによる2拍子の軽快な音楽である。ドヴォルザークのスラヴ舞曲を連想させる。

第3曲：アンダンテ・ソステヌート「間奏曲 葬送の音楽」

ラドゥースの父王を悼む、憂いに満ちた緩徐楽章である。

第4曲：アレグロ・アパッシオナート「ルナの呪いと愛の勝利」

王妃ルナの怒りと呪いを表す激烈な音楽で始まるが、後半で音楽は明るく穏やかになり、第1楽章のマフレナの主題が復活し、最後は独奏ヴァイオリンが美しく締めくくる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、バスクラリネット、トライアングル、タムタム、ハープ、弦五部 ※スコア上の表記